

シンタクス情報多重変換によるセミストロング 形成アプローチ

逸見 彰彦

(株)マーケティング総合設計研究所 〒1800001 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-1-10-205 faridatky@hotmail.com.

あらまし

本報告は、エージェントとして操作可能なファイナンスポートフォリオ上に現れるセミストロングフォームを形成する一定のウィークフォームに関する、暗黙的経営情報に関する変換モデル設計に関する議論である。通常のセマンティック知識システムと異なる、エージェント組織システム上のシンタクス情報であって、一定の変換過程を経る事により、広義会計情報として数量化可能な大域的モデリングである。本議論においては、対象となる事象説明性を、関係系、他者連率的な二つの議論に分け、議論を行なう。第一に与件上、外生市場からの資源の投入がないと仮定される大域エージェント集合においてクライアント エージェントの自己組織化則定に関しての一定の議論を整理する。クライアント エージェント間の意思決定情報交換性は、連続するセマンティック知識平面、即ち、セマンティックガウス平面として、セマンティック平面階層構造の球状化が可能である。第二に、基本的な外部開放系社会モデルを想定し、クライアント エージェント間の意思決定交換性のうちシンタクシユアルな、ホワイト ガウシアンを、複数のKLダイバージェンス間の連続な可動性により、セマンティック ガウシアンとして二次的に発見、再定可能である事を示す。

キーワード インビダンスなKullback Leiber 測定 知識システム シンタクス情報の二次的な流動化
GIS インクダンス管理会計

Semistrong form reform by conversion study about non descreate syntaxual conditions

AKIHIKO HENMI

Marketing Grand Design Laboratory Inc. faridatky@hotmail.com.

Abstract

In this paper, I intend to describe some semistrong finance form reforming views about installable syntaxual invisible tacitly accounting elements which should be planned according to common knowledge system structures. And on these issues, we should discuss syntaxual accounting element measurabilities, and optimized modeling about investment portfolio which should be suit to super extensive client agent models. This paper mainly due to syntaxual knowledge elements usually convoluted to weak form which should be adoptable Kullback-Lieber non descreate models. This paper shows that quadratical conversion from social non descreate syntaxual social conditions toward semantic knowledge geometries can be describe by adoptable Kullback-Lieber conversion models in bench models. And therefore several KL conversion scopes about graphical geometries and other sort of studies and experimentals should obtain alternative application discourse for semistrong semantic knowledge description on this way.

Key word Kullback Leiber measurment Knowledge semantic system Measurabilities of Social syntaxual conditions
GIS Incance management accounting systems

序章

本議論においては、対象となるポートフォリオ空間を、基礎議論の便宜上、開放系、他者連率的な二つの議論に分け、議論を行なう。第一章においては、外生市場からの資源の投入がないと仮定される大域エージェントポートフォリオにおいてクライアント エージェントの自己組織化測定に関しての一定の議論を整理する。および、大域社会システム内でのクライアント エージェント間の意思決定情報交換性を、連続するセマンティック知識平面、即ち、セマンティック ガウシアンとして、セマンティック平面階層構造の球状化が可能である事を述べる。第二章においては、外部開放系社会モデルを想定し、外部システムからの連率行動も包括するクライアント エージェント 間の意思決定交換性のうちシンタクシュアルな、白色ガウス平面を、複数のKLダイバージェンス間の連続的な同軌性により、セマンティックなガウス関数として二次的に発見、再定位可能である事を示す。またこの議論は、意思決定情報交換性として、大数化したクライアント エージェント環境下のウィークフォームが一定のセミストロングフォームを更改する事を示す。

第一章 閉鎖系ベンチモデルにおける静的な可視性モデル

本章では、セマンティック平面における同義性エージェントネットワークモデルをクライアント集合に持つアドボカシ社会モデルに特有の一義的にクライアント 関係が定義不可能なモデリング上での意味ランザクション構造の定義議論である。本章では、本稿の講述目的であるセミストロングフォームモデリングに関する大域白色ガウス領域に関して、セマンティックな変換モデル形成には、ポートフォリオモデルの白色性計測での階層化が重要である事を明らかにする。

[1] クライアント エージェント集群設定と、閉鎖系ポートフォリオ測定に関する基本議論

閉鎖系ポートフォリオ測定に関するスペクトル需要分析に関して、仮に各セマンティック平面における連続的なノード群が提供する条件情報がクライアント エージェント及び広義の階層化されるエージェント集合により自己組織化されるとすると、提供する条件情報の重み付き情報を条件情報の尤度への貢献度 w_1 とすると、データに仮定されたインタメディエータを $\{P(x); \theta \in \mathbb{Z}\}$ 、セマンティクス平面空間モデルを $q(x)$ とすると、データに仮定された エージェントモデルは、Kullback-Leibler ダイバージェンスにより、

$$KL(p, q) = \int p(X) \log \frac{P(X)}{q(X)} dx, \quad \Sigma KL = \int P_X(X) \log \frac{P(X)}{\prod_{i=1}^m P_i(X)} dx$$

この場合、自己組織化が クライアント エージェントモデル $p(x)$ において進行するとすると、 $W1(\theta n) = \operatorname{argmin}_{\theta \in \mathbb{Z}} KL(p, q)$ は近似的最尤推定量となる。

担し、この場合、クライアント エージェントモデルは自生的なランダムウォークを行うと、ローカルミニマム問題が生じる。即ち、ランダムネスによるセマンティック平面における最急降下方向ベクトル $=0$ の地点を持つ可能性がある。

即ち、条件情報 θ に関する最急降下方向でパラメータスカラー θ に関して

$$-\frac{\partial L(\theta)}{\partial \theta} = 0 \quad \text{となるセマンティック平面スカラーが存在し、リラクタントな} \\ \text{ランダムウォークに関する計測性が不能力点を持つ可能性がある。}$$

この最尤推定量による計測関係に付いてローカルミニマム問題を回避する
自己組織化計測を行うとすると、少くとも $-\frac{\partial L(\theta)}{\partial \theta} \neq 0$ となる $\theta(t)$ を常に

持つためには、 $\partial \theta$ が0でないセマンティックなクライアント エージェントを常時持つ必要がある事が明らかであるが、これは、連続体モデルとしてのリラクタントなエージェントモデル計測問題として解決出来る。即ち、クライアントエージェントにおけるセマンティクスおよび他の条件情報相互関係的な情報をエージェントモデルが連続的に処理出来る」と、

$$\theta(t+1) = \theta(t) + \partial \theta \quad \frac{\log p(y(t) | x(t); \theta)}{\partial \theta} \text{とランダムなリラクタント連続体モデルを表わす事が出来る。}$$

即ち、クライアントエージェント計測のためには、少くともバッチ処理モデルによる知識システム下のナレッジマネジメントにおいてはローカルミニマム問題の生起のため、ランダムなリラクタント計測は不可能であり、連続平面上の上での クライアントエージェントモデル計測が必要である事が示される。

基本的に以上の論点から、クライアントエージェントモデル計測上のスペクトル需要分析に関しては、連続平面上でのモ

デル計測が前提となることが出来るものであり、かつそこで必要となる問題設定は、クライアントエージェントモデルの自己組織化における互いに独立した複数の階層化された情報条件、即ち、クライアントスカラ同志の階層化情報交換条件、セマンティクス空間の多様性条件、クライアントスカラに大域定義性、即ち、一定のセマンティックネットワーク集合をもつアドボカシ情報集合に対する習熟性のばらつき条件の三つの独立成分条件によるスペクトル需要分析が必要となる。基本的にこのスペクトル需要分析に関しては、ICA (Independent Component Analysis) によって独立信号を復元することが出来る。基本的に、独立で分散が等しい確率変数は、正規分布をとる時、独立性の検定は不可能である。本稿で対象とするスペクトル需要分析での独立性の検定は連続でなければならないから、無相関性の検定が含まれるものである。

複数のスペクトル信号の独立性を上記と同じく Kullback-Leiber ダイバージェンスによって測定しようとするれば、スペクトル信号相互の独立成分の周辺密度の代わりにスペクトル信号密度関数を用いた Kullback-Leiber 推定量の最尤推定量の最小化で求める事が出来る。即ち、あるスペクトル信号の確率密度を

$$R(x) \text{ とするとき、} KL(W) = \frac{1}{n} \sum_{t=1}^n \log \frac{R(x(t))}{\det(W) \prod_{i=1}^m Ri(Wi(t))}$$

の最小化が最尤推定量となる。

ところが、ここで測定されるべきスペクトル信号密度関数は、それ自体単独で複数以上のセマンティック階層もしくは、相互作用の存在するクライアントエージェントとの間の、階層コンポーネント性を持つ。これを Kullback-Leiber 推定量の同階層化された情報時層別モデルとして、Green and Silvesters の Kullback-Leiber Joint Quantal Model として表現すれば、求める層別モデルとして、最尤推定量の最小化によって検定すべきモデル $KL_Q(W)$ は、

$$KL_Q(W) = \sum_{R_i \rightarrow 0} \pi R(x, \omega_r) \\ = \sum_{R_i \rightarrow 0} \frac{1}{\{2 \pi (\sigma_{2n+r}^2 \sigma_{2q}^2)\}^{1/2}} \frac{\exp \cdot (x-rq)^2}{2 (\sigma_{2n+r}^2 \sigma_{2q}^2)}$$

担し、 $\pi_r = N C_r P_n (1-p)^{N-r}$: binomial or $\pi_r = \frac{m^r e^{-m}}{r!}$: Poisson

この時、 $m (= Np)$: mean quantal content N : number of active release sites

p : release probability

q : quantal size

σ_{2q} : quantal variance

σ_{2n} : noise variance

ここで求める層別スペクトルモデルは、階層性とともに特異点を持つものである。

本節で以上述べた K L 層別スペクトルモデルの手順は、あくまでシンセシス行動としてのクライアントエージェントモデル行動の層別スペクトル単位レベルでの計測性に関する部分である。基本的には独立性が識別可能な層別スペクトル単位の分析によりセマンティクス再構造化及び、エージェントモデルのサブカテゴリによる再分割は行なわれなければならない、クライアントエージェントモデルに分散定義すべき連続な計測モデルが決定される。

[2] クライアント エージェント の ポートフォリオ上の特異性により想定されるリラクタンシー

本章において、与件性として設定した、相互伝達可能なポートフォリオモデルにおける可視化議論は、N次のセマンティックネットワーク平面階層構造の球状化を前提としたものである。即ち、広義のランダムネスに支配されるN次セマンティックネットワーク平面階層構造内のノード連鎖を行うクライアントの入出力構造であると位置付けられている。球状化定義はパラメトリックな分散復元信号の分散単位行列により必要条件が形成されるとするものであるが、復元されるべきクライアント集合の復元行列における独立成分が、各クライアント エージェントの意思決定過程と独立であるとは定義する事は出来ない。各エージェントがシンタクススペースでの相互作用の困難性の超克化、及びエージェント間でのセマンティック交換性を担保出来ていると定位されるポートフォリオ大域が描写されるとすれば、広義のN次セマンティックネットワーク平面階層構造内のエージェントの連結化を クライアント エージェントが意思決定する過程でのエージェント間でのセマンティック交換性が有意である様に設計出来れば、復元されるべき エージェントの復元行列Wにおける独立成分と独立成分の近似周辺密度による相互情報量が正である。即ち、エージェント間の同時独立成分分布と、周辺密度分布による意思決定情報交換性に付いて、Kullback-Leiber 情報量において計測可能である。意思決定情報交換性の、Kullback-Leiber 情報量による計測は、密度推定関数の相互情報量モデルの導出に置換出来るから、密度推定関数 $CI(X)$ は

$$CI(X, W) = \log(p(x(X))) - \log(\det(W) \prod_{i=1}^m Ci(Wi, X))$$

この場合、 $CI(X)$ で表現されるのはエージェントの相互情報交換適的な集群化である。即ち、エントロピーが最大化となる相互学知交換可能域で、ポートフォリオ環境によって行なわれる相互情報交換環境域の、非対面環境領域への拡張域を示す。かつ、非対面環境領域への拡張域を含む密度推定変数 $CI(X)$ の相互情報量が相互情報交換環境域における密度推定変数の相互情報量以下もしくは等しくなる場合を、ポートフォリオ環境下の相互情報交換環境上既知コントロール領域とする事が出来るとすれば、密度推定変数 $CI(X)$ で密度推定変数の相互情報量 $D(W)$ は、

$$D(W) = \frac{1}{n} \sum_{t=1}^n \log \frac{P_X(X(t))}{\det(W) \prod_{m=1}^m P_i(W_i X(t))} \quad \text{であるから、最尤推定法により、}$$

$$\prod_{t=1}^n D(W) = \max \int \sum_{t=1}^n \log \frac{P_X(X(t))}{\det(W) \prod_{m=1}^m P_i(W_i X(t))}$$

$$D(CI(X)) \geq D(W).$$

の最小二乗誤差を求める事で、求める拡張域の持つ密度推定変数 $CI(X)$ を求める事が出来る。基本的に密度推定変数の相互情報量を最大化するマネジメントコントロール領域にあるエージェント集団においては、相互情報量が限りなく1に近いクライアントが存在する筈であるが、学習過程にある エージェントとして淘汰されない。即ちエージェント集団環境に関しては、いわゆる管理会計としての独立性あるクライアント集団として、分別化出来るクライアントの行動履歴の成熟は必ずしも期待する事は出来ないものであるから、インターミディエータ環境自体の独立性検定は、基本的に積極的な意義を持たない環境である場合もありうる。あくまでもこの様を示しているクライアント環境は、具体的にはエージェント間の議論可能性環境を示しているに過ぎない。クライアントの行動履歴が未成熟の場合、即ち、ポートフォリオ上の環境自体エージェント独立性検定の根拠が極めて重いスーパーガウス環境の場合、議論可能性が担保されたシンタクス交換においても成果が導かれる可能性が低いであろう。基本的にクライアント環境の独立性検定は実際にそのインターミディエータ環境を所有するエージェントモデルの情報媒介生産性が定義されるならば、エージェント環境の限界独立性向として帰納的に策定される。

また、クライアントエージェントは、需要性による行動予測が不適切なものとして位置付けられる。即ち、エージェント媒介能力というエージェントの能力カテゴリにおいて新規エンドースメント能力により実行されるエンドースメントで内部連鎖性を持つとする垂下的なエージェント集合の新規意思決定は、クライアントエージェントの時系列はリラクタントなものとして位置付けられる。少くとも、非成熟的、即ち、情報媒介生産性上は最適なスカラ集団ではなくセマンティックな媒介性としての意思決定情報の分類可能性率が低く、シンタクシアルでウィーク、暗黙的な、エンドースメント行動過程において可視化計測が相対的に困難性を持つ慣習因子等も混合したエージェント環境が設定されている場合、リラクタンシは広義定義である必要があり、狭義のトランジェントと、リラクタントの集合である必要がある。このエージェント環境を独立同分布確率変数即ちランダム ウォークとして定義するとすれば、適格的であって非周期的なランダム ウォークとして、エージェント環境の挙動需要行動をモデル化する事が出来る。

垂下的なエージェントの行為単位ベクトルを $R(x)$ 、ランダムウォーク が出発点に戻らない確率を q とすれば、単位ベクトル関数 $R(X)$ の微分化による単位ベクトル関数 $\lim R(X)$ の集合 $\sum \lim R(X)$ は、

$$q=0 \rightarrow \sum_{n>0} \lim (R(X)=0) = \infty \quad (1)$$

$$q>0 \rightarrow \sum_{n>0} \lim (R(X)=0) < \infty \quad (2)$$

$$\sum_{n>0} \sum_{k>0} (R(X)=0) < \infty \quad (3)$$

1の条件の時密度推定変数 $R(X)$ の単位ベクトルはマルコフ連鎖モデルとなる。Pittは確率分布空間 Z d上のランダムウォークに関する大数の法則を、時刻 n までの $R(X)$ の単位ベクトルの訪問スカラ点を Q_n とすれば、

$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{Q_n}{n} = q^2$ で全ての非再帰的ランダム ウォークが成立する事で示しており、
また、Erdos Taylor は、上記(1)によるマルコフ連鎖

による再帰的ランダムウォークが成立する確率分布平面 Z_d 上による大数の法則に関して、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{(\log n)^2 Q_n}{n} = \pi^2$ 担し、この場合、

比較的 に独立な確率変数列の部分和として確率分布空間 Z_d が表現出来る場合に限定される特殊再帰的比較的ランダムウォークに関する大数の法則に該当する。本稿で議論対象とするエージェント単位ベクトル集合は、それ自体、階層的な制御環境下で階層内空間重複を定義上想定していない。即ち、経済合理的にはエージェント定義はそれ自体経済主体としての境界性の所有を前提とした階層的アクタ定義でありエージェント自体に空間重複のないボロノイ空間での議論であるのは明らかであるから、Erdos Taylor の特殊再帰的ランダムウォーク定義は、本稿議論に適用可能と思われる。

非再帰確率 $q=1$ の単位ベクトル関数 $\lim R(X)$ の集合 $\sum \lim R(X)$ を含む特殊再帰的ランダム ウォークボロノイ空間を

前提としてエージェントの空間の定義を行うとすると上記定義により、エージェント集合数が有限である場合、即ちボロマイ空間を部分空間として使用する場合のエージェント空間は、

$$\sum_{n=1}^m Q_n = 2 \int_m \frac{n}{\log n} = -2 \pi \int_m \frac{\log n}{n} < \pi^2 \quad (4)$$

(4)で示されるエージェント空間において意思決定情報交換性の、Kullback-Leiber 情報量による計測即ち、密度推定変数の相互情報量モデルを示すとすると、和分相互情報量は、

$$D(W) \approx \frac{1}{n} \sum_{t=1}^n \log \frac{P_X(X(t))}{\prod_{m=1}^m \Pi_{i=1}^i P_i(W_i X(t))} \quad 2 \log n$$

本稿で議論とする階層型環境は暗道過程論として垂下的に統制化される過程モデルであって、当然内部連鎖するエージェントスカラー数は限定化され、かつ一定のエージェント連鎖モデルが外部環境について未受容な事も想定されるのであるから、ある程度の和分相互情報量エントロピーを階層型相互情報連鎖環境として設定する事になることは、明らかに想定出来る。

[3]. ファイナンスモデルに付加される両義性クライアント定義と、需要連鎖下で想定される特性

実体環境における自律的マネジメント特性により従来の連続平面としてのファイナンスモデルとしての議論に含まれない非定形的行為を含むものとなる経済的なエージェントは、単義性を持つクライアントモデルで説明が十分可能でないクライアントモデルを持つものである。また、ポートフォリオ内部の共有知識情報階層は、それ自体既往の慣習、移入法理義論性により整序されるため、対象議論されるべき推論エンジンは少くともアクセス確率の出現率との相関が、帰納的に低い事が明白な新規エンドスメント過程に関与するものであり、分割定義されるべきエージェントはオープンソースネットワークとして動的に定義される特殊シンタクスモデルとして知識表現される。ここで述べるシンタクスモデルは、計測議論における、イトとともに需要モデル整序されないため、クライアント側の分類機能により、需要者側のアクセス行動が個別プロファイルとして記述される必要がある。オープンソースネットワークとして動的に定義される特殊シンタクスモデル下で想定される行動の政策去理合理避因子としての需要計測性に関してはエージェント集合からのプロファイルの集計機能を基に設計されなければならない。この領域でのナレッジエンジニアリングは未開発であり、議論可能性と階層的紐着性がある連鎖量による類型性定義による間の集群化に基づいた計測開発が必要であろうと思われる。また、第二にナレッジエンジニアリングの下位階層の問題としてのインスタンスとオブジェクト関係、即ち、インプリケーションベースの可視化に付いての詳細なディスクリプションに基づくモデリングに付いても、クライアントのセマンティック階層によって異なるものが必要となる。

即ち、別の文脈におけるディスクリプションに基づく可視化はそれ自体、セマンティック階層によって異なるモデリングデザインによって再構成され、可視化の文脈による白色性が分割されなければならない。第三に、第一、二点で明示したクライアントインタミディエータ特性は、需要特性スプレッドの多様性を前提とする。

空間連続性による 割引効用を $f(\theta)$, $0 < \theta < 1$ とし、 θ がセマンティック空間密度を $\theta-1$ とすると、そこでのエージェント部分集合 x, y の効用関数は、空間内でのエージェントの情報獲得性であるから、

$$U(x) = f(\theta-1), \quad U(x, y) = U((x, \theta), y)$$

担し、あるセマンティック管理会計空間階層のエージェント部分集合を $\text{club}(x, y)$ のとき、 $U(x, y) = U(fx(\theta-1), \theta, y)$ 。

期待利益 $P(x, y)$ は $\theta-1=1$ となる時求められるとすると、

$$P(x, y) = U(fx(\theta-1=1), 0, y)。$$

このとき、割引効用 θ は、階層オーバーラップな セマンティック空間モデルでは、連率型情報群の事象特異性により、クライアントにとって均質的な要素ばかりが並んでいると言えない。仮にセマンティック管理会計空間要素特性を一定とすれば、 $\theta=0$ の時 P

本対象管理会計は、複数空間の階層オーバーラップモデルであるから、 $\text{Maximise}[U(\alpha)]$ は、各空間階層のセマンティック有意な密度 $\theta-1$ の SME モデルの最大値、 $\text{Maximise}[U(g(\theta-1))]$ により求められる。この場合、基本的に、連続空間層平面を構成するとされる各平面の $\theta-1$ の密度数値には有限性から和分相関性が存在する事は極めて明らかである。連続平面としてインクダンス平面であるセマンティック重空間層を定義したとしても、学知有限性と、その動的的な増分性向により、離散型効用モデルとして逸失コストを定義する事が出来る。

第二章 開放系ポートフォリオにおけるエージェント可視化モデル～自己変容のダイナミクスを前提とする可視化モデル

本章においては、前章において論脈上設定した閉鎖系ポートフォリオに見るセミストロング白色ガウスの変換可視化問題に
対し、閉鎖系ポートフォリオ空間に優越する自己変容過程を、ポートフォリオ外部からの移入モデルとして議論する。これ
を移入モデルとすれば、移入モデルは通常ポートフォリオモデルに見るセミストロングフォーム再組織化行動の一つとして
位置づけられ、目的合理的エンドースメントを再組織化行動の上での動員性として持つものである。少なくとも移入モデルが
その再組織化過程の性格上、社会価値構造上の転至性即ち、従来の組織階層構造上、重要なシンタクスの再統制化を導引す
る因子性をそもそもその大域的定義上持つものであるのは明らかである。

[1] 射影一次同次問題として議論可能な開放系エージェント可視化モデル

本稿で対象とする可視化計測性に関しては、大域的なモデリングにより、少なくとも連続インクダンス平面の復元過程とし
て表現、計測モデルを構成出来る事に留意せねばならない。即ち、社会移入政策モデルアーキテクチャ自体をインクダントな
重層的会計平面群と見るならば少なくとも開放系ポートフォリオにおけるエンドースメント連率性は、多層階層において、どれ
ほどエンドースメント連率性を表現する測地モデルがエンドースメント外部主体からの情報を歪曲化なく伝達しようかとい
うモデルアーキテクチャ自体の射影計測問題として表現出来る。しかしポートフォリオモデルの射影計測問題は、エンドース
メントプログラム自体の法理を、直接一次的に表現するものでない事は明らかであり、限定化を含む議論に関しては、ポート
フォリオモデルの射影計測問題によってきたる媒介性を捜入した結果性による議論として位置付けられる。

一機層論として、クライアントエージェント、非正規性が支配するセマンティック大域平面間の相関関係は、クライアント
エージェント機能をセマンティックフレーム階層に対する球状化エージェントとする復元過程として相関関係を表現出来る。
復元行列の直交性は、Kullback-Leiber 情報量による統計的距離問題として説明出来る。即ち、 m 平坦性と e 平坦性の間の
射影の一意性問題として説明出来る。通常多変量線形解析問題における me 平坦性は同値の平面多様体モデルとして幾何化
されるから、 m 測地線と e 測地線は同値となる。即ち、

$$m \text{ 測地線 } r(X, t) = (1-t) \cdot p(X) + t \cdot q(X), 0 \leq t \leq 1.$$

担し、 $p(X)$ は m 平坦性の密度関数 $q(X)$ は e 平坦性の密度関数とする。

e 測地線 $\log(X, t) = (1-t) \cdot \log p(X) + t \log q(X) - \phi(t)$ $0 \leq t \leq 1$ 担し $\phi(t)$ は $r(X, t)$ が非正規性が支配する大域会計測言語性
として設計される為の正規化因子であり、Kullback-Leiber 情報量によれば $\phi(t) = \log \int p(X)(1-t)q(X)dx$.

即ち、 $r(X, t) = \log(X, t)$ a.e. ならば $\phi(t) \geq 0$ かつ $\phi(t) = 0$ でありこの恒等式を満たす時のみ m 測地線と e 測地線は同値とな
る。実装するべき KL 同次構造方程式は、 $p(X), q(X)$ 管理会計平面とすると

$$KL(p, q) = \int p(X) \log \frac{p(X)}{q(X)} dx \quad \Sigma KL = \Sigma \int p_X(X) \log \frac{p_X(X)}{\prod_{m=1}^M P_i(X_i)} dx$$

担し $KL(p, q)$ は単相階層モジュールインクダンス ΣKL はポートフォリオモデル全体のインクダンス密度となる。 ΣKL
による全体のインクダンス密度と、各階層毎のトランザクション KL インピダンスの相関により、ポートフォリオモデル上の
最適相互情報量即ちクライアントインタミディエタ集合が持つポートフォリオに対する最適歪み値が決定される。最適相互
情報量は、ポートフォリオモデルの現状のパフォーマンス向上を目的とする場合、即ち、ノードパラメータによる外形性の有
視化が図られ相互情報量を計測する場合と、セミパラメトリックモデルとしての推定関数モデルを適用する場合が存在する。
第一のパラメトリックモデルにおける相互情報量モデルは KL 情報量モデルによるダイバージェンス推定モデルであり

$$Account(\Sigma p) = \Sigma KL(p) + E_{\theta} \int \int p(X) p(Y/p(X)) \log \frac{P_{\theta}(Y/p(X))}{\nabla P_{\theta}(Y/p(X))} dx$$

担し、確率密度 Σ_{θ} によって表わされる平面集合 $\Sigma p(XY)$ は二次確定平面であり ΣE_{θ} が推定精度誤差として KL 検定さ
れる。第二のセミパラメトリックモデルにおける相互情報量モデルは、非可視的な周辺密度関数がクライアントエージェント
からの逆問題として既知量 $g(X)$ として管理会計言語上算出されるとするとセミパラメトリックモデル相互情報量モデルは、

$$Account_2(\Sigma g) = \int g(X) \log \frac{g(X)}{\prod_{m=1}^M g(X)} dx$$

$g(X) = a \exp \frac{1}{4} X^4$ 担しこの $g(X)$ モデルは sub-Gaussian

4 Model(Jutten and Herault (1989))

であり白色ガウシアン情報量が比較的軽い場合に適用可能である。本議論はあくまで管理会計言語算
出モデルであるから、クライアントエージェントにおける白色ガウシアン情報量は、軌進的变化を迎える事が明らかに推察さ
れる。即ち、4 次キウムラント、尖度が負である sub-Gaussian Model である。 $Account_2(\Sigma g)$ は変数変換出来るから、

$$\text{Account}_2(\Sigma g) = \int p_X(X) \log \frac{g_X(X)}{\det(\Sigma g) \prod_{m_i=1}^{M_i} g_i(X)} dx$$

即ち、上記節で記述する二次ポートフォリオ構造として最適化されるエージェント集合のセマンティック情報の交換、獲得動機性の何れにかかわらず、プリンシパル、エージェント集合間の合意形成モデルは非閉鎖化、与件化されるのであるから、本節で議論すべきポートフォリオモデリングとしての大域性需要性定義問題は、専ら、異なるエージェント集合における連率統計情報の、予期性を持つ大域型セマンティック重階層モデルに対する需要スペクトルの最適化問題に交換、帰納する事が出来る。即ち、ポートフォリオモデルにおける大域化条件とは、計測すべき管理会計情報であるセマンティック情報の交換可能条件ではなく、複数に境界化された連率統計情報の需要スペクトルへの交換最適条件を求める事と同値である。

結び 現実問題の所在～基礎議論と、大域的インプリメンテーション～

基本的に本稿は、大域化を前提としたポートフォリオモデルにおけるシンタクシユアルな衡量性を内含せざるを得ない階層連率性差異を閉鎖系、開放系なベンチモデルに二分する時、白色ガウシアンモデルとしてファイナンスモデル上定位される事、シンタクシユアルエレメントは、暗黙的、内在的であって、かつ対外的な通常の知識システムでない、起義の知識システムとして位置付けるべき事により、以上述べたものである。セマンティックに再整理されないウィークフォームに存在する知識カテゴリに関して、少くとも KL 検定を含む一定の N 連続的な二次変換検定を設計する事によりストロングフォームに置換が可能であり、ポートフォリオモデルを、広義のセマンティック知識平面として切り取り論じる場合、白色ガウシアンモデルとして大域ポートフォリオ上のウィークフォームカテゴリに、一定の再置換性が議論上可能である事を示そうとした。

しかし、更に、ポートフォリオモデルとして、包括的、機能主義的に拡張定義議論を再整理すべき層のかつ大域的なポートフォリオ議論を直接的に超大域的な経済政策議論に一元的にコンポリュートする可能性を指し示す為には、これらの議論視角はインプリケーション研究を基盤とした検討と再照準が重要であり、慎重な理論、レンマ上の再編成が必要となる。

一例として、学知対象性を企業とその経営意思決定過程に一定の集中をするコーポレートファイナンス領域との接合において、ウォーレン、モートンらは、外部管理会計論の文脈において、セマンティックネットによるフレーミング技法による需要構造の計測化は、連率性にとって重要であり、外部管理会計としてのセマンティックマトリックスは、それ自体、モデリングに際しての投資コスト最適化モデルとして設計されることを示している。ウォーレン、モートンによれば、外部管理会計セマンティックプラットフォーム全体から見るクライアント エージェント環境は内部管理会計環境として定義される。そして、ウォーレン、モートンによれば内部管理会計構造に対する外部性は言いかえれば有幾的構成システムの外信陳激に対する自己変容の一搬理論の経営組織体論への適応可能性議論としての議論である。また閉鎖系ポートフォリオの有幾構成論は、自律性、境界自己決定性および組織理念型としての入出力概念の捨象論に依拠するものであり、自己生成組織の動態可測性はコンティンジェンシー理論に対する差分計測性としては従属的なものであり、むしろ閉鎖系組織構造の自律性、個体エージェント性問題として論じるべきものとして位置付けられている。一方、外部管理会計行動問題として、本稿議論の関係性を位置付ければ、閉鎖系ポートフォリオ構造としてのエージェントの自律性主体を対象として、連率機能を持つ不特定多数のエージェントクライアントが、連鎖能力の出力を目的とする慣習的環境によって、反射的機動行動を行うものと位置付けられる。

これに関連して、プラカシュ、ラバポートは外部会計環境エージェントの反射的機動行動モデルを情報インクダンスモデルとして定位している。彼らの述べる会計上の「一搬不可能性定理」とは、情報インクダンスモデルにはエージェントクライアントの不特定多数の効用意思決定が存在し、同時に一搬不可能性が存在するというものである。

この「一搬不可能性定理」議論におけるインクダンス性は、社会科学上 V. ベストフらのアソシエーション型重階層型アドボカシモデルの、構造主義的社会モデルと比べ詳細、微分的ではあるものの、大域的にはレプリカブルであって、モデル差分計測可能性においての、外部会計モデルにおけるインクダンスモデル実装化の議論が可能である。即ち、「一搬不可能性定理」における議論実装された差分計測可能な情報インクダンスモデルは、セマンティック階層性に基づく同義性クライアントの期間情報機会逸失コストの離散型確率分布の計測により、そのデザインを更新する事が出来る開放型のインクダンスモデルを形成する事によって、一定の超克も可能である。更に、この仮説的超克性の文脈の先には、学知対象性における超克性、即ち、従来は、マクロ経済学、厚生経済学知の文脈で論じられ、白色性に付いて社会レントとしか認識される事のない、社会構造上の「ゆがみ」や「腐敗」に関して、一定のセマンティクスとして衡量され、直接的な離散型逸失コストの管理会計計測性として、連続型の地理経済学上の連続平面でのエージェント逸失コスト計測性に、有限性制約を加える事と同義は言える。一搬議論としてはアソシエーション型アドボカシモデル自体は有限性制約のないエージェント定義で適用可能である。

しかし、ここで議論進展を期待されるある社会構造モデル議論が、ファイナンスモデリングとして万能のバースペクティブでない事も明らかである。例えば、V. ベストフらの述べるアソシエーション社会組織モデルとしての統制組織化情報の特異性に関する議論を見てみると、これは、今後予期されるアソシエーション社会構造モデルにおけるエンドースメント環境を包括したものではないということである。

V. ベストフは、社会福祉社会の進行過程で、公共政府モデルの補完社会組織モデルとして、産業組織、コミュニティ、インフォーマル社会組織との媒介横断的社会組織が生成する事を示している。少くともある一定の目的的な政策上での後背を持つアソシエーション組織は、それ自体目的合理的な需要と公共政府内での政策意思決定過程を所有していると述べる。

この政策実行過程における必要性とは、政策導出過程を問わずセマンティックスに意味の交換性が担保されるという意味である。少くともアソシエーション組織の移入社会政策モデル下での再定義化に関しては、統制組織化として再組織化下環境において設定される統制モデル、計画化モデルは、目的合理的な需要設定下でのセコンドベストな最適性を、コミュニティ再組織化、およびコマーシャル再組織化、および公共セクタ再組織化に対して持つという分類関係性の中で議論すべきであって、そのセマンティックス交換性はあくまで相対的なものである。即ち、本稿で述べるシンタクシユアルなエレメントの再定位議論は、エージェント環境として、動的的なシンタクシユアルな統制政策管理層による二次的な再構造化が規模上の議論として必要となるという事であるが、社会科学上の文脈では必ずしも同義とは言えないのである。

更に明らかになるのは、主に公共政策去理及び、相対的に公共政府、公共セクタによる内生投資が、全内生生産投資の過半以上を占める開発国における公共政府政策去理即ち、その開発援助政策、及び政策導出過程研究におけるインプリケーション研究の同軌性に付いて示している地理経済学議論上のインプリケーションにおいても明らかな地理経済学的な有限エージェント集合としての地理再定義の最適化議論と同軌する議論としても、議論対象とする二次管理会計構造の最適化議論は存在しているという事である。むしろ、上記述べた、社会構造理論上の再生産としてよりも、この、政策上での開放系モデルとしての地理経済学上の再投資大域ポットフォリオの議論の方にむしろ直近の超克可能性を見出すべきであろう。

References

- ◆Chambers.R.J. "The Possibility of a Normative Accounting Standard" *Accounting Review* 1976.
- ◆Chandhasekaran B: "Generic Tasks in Knowledge based Reasoning: High Level Building for Expert Systems Design" *IEEE Expert* pp23~30. 1986
- ◆David.E.Goldberg: *Genetic algorithms in search, optimization and machine learning*. Addison-wesley 1989
- ◆Haykin S. 199 *Neural Networks*. Macmillan. Colledge publishing New York
- ◆Lowe. D. 1991. On the iterative inversion of RBF networks : A Statistical interpretation Second. *IEEE International Conference on Artificial Neural Networks Conference Publication*. 349. pp29~33.
- ◆Moody. J. Wu. L. Liao. Y. Saffell. M. "Performance Functions and Reinforcement Learning of Trading Systems and Portfolios" *Journal of Forecasting* 1998 pp441~471
- ◆Ng. Y. K. 1978. The economic theory of clubs: Pareto optimality conditions. *Economica*. 40. pp. 291~298.
- ◆Pestoff. V. A. 1992. "Third Sector and Cooperative Services- An Alternative to Privation" *Journal of Consumer Policy* No. 15
- ◆Prakash. P. and Rappaport. A. Information Incidence and Its Significance of Accounting. *Accounting Organization and Society* 1977.
- ◆Steels. L.: *Cooperation between Distributed Agents through Self-organization, Decentralized AI*. (Y. Demazeau and J.P. Muller eds.) North Holland 1990. pp175~196
- ◆Singer I. *Abstract Convex Analysis*. Wiley-Interscience Publication, New York 1997
- ◆Rubinov. A. M. *Abstract convexity and global optimization*. Kluwer Academic Publishers 2000
- ◆Pallaschke. D. Rolewicz. S. *Foundations of Mathematical Optimization (Convex analysis without linearity)* Kluwer Academic Publishers, Dordrecht 1997
- ◆Borwein. J. M. Preiss. D. A *smooth variational principle with application to subdifferentiability and differentiability of convex functions*. Trans America Mathematics Society 303 pp517~527
- ◆Pitt. J. H. "Multiple points of transient random walk" *Proceeding American Mathematics* 43 1974 pp195~199